

教師の攻撃行動の捉え方に関する予備的検討

和智遥香（東京大学）

Preliminary Study of Teachers' perception of aggression

Haruka Wachi

Author's Note

Haruka Wachi is a PhD Student, Division of Clinical Psychology, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

In recent years, the idea of catching bullying as a group has become mainstream, and the approach to bystanders is drawing attention. However, in “group” bullying, bystanders are more likely to change into assistants, making it difficult to approach bystanders. It has been shown in foreign countries relational aggression which are likely to occur in “group” bullying are viewed differently from other aggression (physical aggression and verbal aggression) by teachers, and the willingness to intervene is low. However, there was few researches which focus on teachers’ perception of bullying in Japan. Therefore, the purpose of this study was to examine how teachers perceive aggression in “groups”. The results showed that relational aggression in “groups” were perceived as less serious than physical aggression, were perceived as more common, victims were less likely to empathize, and were less willing to intervene. However, there were some types of aggression that do not make a difference among the relational aggression, and the teachers’ perception is different even for the aggression that can be summarized as a relational aggression.

Keywords: aggression, teacher, attitude, group

キーワード：攻撃行動，教師，態度，グループ

教師の攻撃行動の捉え方に関する予備的検討

1 問題と目的

「いじめ」という現象は 1980 年代以降、社会問題として取り上げられている。いじめとは「①児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人間関係のある他の児童生徒が行う②心理的又は物理的に影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、③当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。④なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」ものであり（文部科学省, 2013）、「ある生徒が、繰り返し、長期間にわたって、一人または複数の生徒による拒否的行動にさらされている場合、その生徒はいじめられている（p. 28）」と指摘されるように（Olweus, 1993）、児童生徒の間で起こる心身に苦痛を与える行為であると考えられる。いじめに対してこれまでに様々な取り組みが行われてきているが、2013 年にはいじめ防止対策推進法が施行され、国や地方公共団体、学校はいじめ防止の対策をすることが義務づけられた。しかしこのような法律のもとでもいじめは消失しておらず、令和 2 年度はいじめの認知件数は小学校で 420,997 件、中学校で 80,877 件、高校で 13,126 件で 51 万件を超えている（文部科学省, 2021）。コロナ禍でのオンライン化などの影響で令和元年度と比較すると減少傾向ではあるが、それでも依然として認知件数は高い状況であることがうかがえる。また本間（2003）は認知件数の背後には学校側が気付かないいじめがかなり潜在している可能性があることを指摘しており、実際に起こっているいじめの件数はさらに多いことが推測され、いじめへのさらなる対応は喫緊

の課題であると考えられる。

近年ではいじめは被害者と加害者という二者関係だけで成り立っているわけではなく（Espelage & Swearer, 2003）、周囲の生徒による影響もあることが指摘されており（Atlas & Pepler, 1998）、いじめを集団で捉えることが主流になっている。例えば我が国ではいじめの四層構造という理論が提唱されており、学級集団を加害者、被害者、観衆、傍観者の 4 つの役割から捉える必要があることが指摘されている（森田・清永, 1986）。四層構造は我が国のいじめ理論のなかで最もメジャーなものであり（荻上, 2018）、文部科学省のホームページにも引用されるなど（文部科学省, 2003）、学校現場での四層構造に基づいた対応が目指されていることがうかがえる。また諸外国では participant role という考え方が提唱されており、クラスを加害者、被害者、強化者、加担者、援護者、傍観者という 6 つの役割のもとで捉えている（Salmivalli, Lagerspetz, Björkqvist, Österman, & Kaukiainen, 1996）。そしてこれらの理論から傍観者の重要性が指摘されるようになり、傍観者にアプローチする介入が検討されている（e.g., Salmivalli, Kärnä, & Poskiparta, 2011）。

このようにいじめを集団で捉える理論が発展してきているが、クラスでいじめが起りやすいことが指摘されていたために（e.g., 河村・武蔵, 2008）、これまではクラスのいじめに着目していじめを捉えることが多かった。しかし餅川（2011）はクラスの視点からいじめを捉えることは説得力を持つとしたうえで、現実の子どもの世界に本来の学級集団は存在していないことがあることを指摘している。クラスのなかには

「同じ学級の児童・生徒で構成された、休み時間などの時間になると、いつも一緒に過ごす児童・生徒の集まり」であるグループが乱立しており（山中，2009），クラスの全ての子どもが関与して起こるいじめもちろんあるが，クラスのなかに乱立している小さなグループのなかでいじめが起こっている場合もあることが指摘されている（餅川，2011）。特にグループでいじめが起こる場合には傍観者が次のターゲットになることを恐れて，またはグループへの所属感を得るためにいじめに加担することが指摘されており（Adler & Adler, 1995; Garandau & Cillessen, 2006），傍観者がいじめに介入したり被害者を援護するのではなく，いじめをより促進する方向に動いていることがうかがえる。このことからこれまで傍観者へのアプローチが効果を上げつつも依然としていじめがなくなっていないことには，グループでのいじめが影響しているのではないかと考えられ，グループでのいじめに着目した検討が必要ではないかと考えられる。

グループでは関係性攻撃と呼ばれる攻撃行動が起こりやすいことが示されている（e.g., Owens, Shute, & Slee, 2000）。関係性攻撃とは「意図的な操作や仲間関係にダメージを与えることによって，他者を傷つける行動（Crick & Grotpeter, 1995 関口・濱口訳 2015 p. 295）」、「受容関係や受容感，友人関係，または集団への仲間入りに危害を加えること（またはその脅し）によって，他者を傷つける行動（Crick et al., 1999 磯部訳 2001 p. 379）」と定義される攻撃行動であり，具体的には無視や排除などが含まれる。

このことからグループでのいじめについては関係性攻撃に取り組むことが重要であると考えられるが，関係性攻撃は身体的攻撃や言語的攻

撃という他の攻撃行動よりも教師が介入をしようと思わない傾向にあることが諸外国では示されている（e.g., Yoon & Kerber, 2003; Bauman & Del Rio, 2006）。また介入に影響を及ぼす要因についても，他の攻撃行動とは異なる面があることが示されている。例えば教師がどのように攻撃行動を捉えるかによって介入の程度が異なると考えられているが，関係性攻撃は他の攻撃行動に比べて深刻であると捉えられず（e.g., Yoon & Kerber, 2003; Bauman & Del Rio, 2006），一方でよくある行動と捉えられる傾向にあることが示されている（Swit, 2021）。また被害者に対する同情や共感も身体的攻撃，あるいは身体的攻撃と言語的攻撃の双方に比べて関係性攻撃よりも低い傾向にあることが示されており（e.g., Yoon & Kerber, 2003; Bauman & Del Rio, 2006），介入の意志とともに教師の捉え方が身体的攻撃と言語的攻撃とは異なることがうかがえる。

しかしこのような教師を対象とする検討は我が国では少なく，我が国独特のクラス制度などやそのなかに存在するグループにおける教師の捉え方については検討されていない。そこで本研究ではグループにおける攻撃行動を教師がどのように捉えているのかを検討することを目的とする。仮説は以下の通りである。①教師はグループで起こる関係性攻撃よりも身体的攻撃や言語的攻撃を深刻と捉える。②教師はグループで起こる関係性攻撃を身体的攻撃よりもよく起こる行動として捉える。③教師はグループで起こる関係性攻撃よりも身体的攻撃や言語的攻撃において被害者に同情を示す。また教師の捉え方ではないが，先行研究にならって本研究でも介入の意志に関しても以下の仮説のもとで検討することとする。④教師はグループで起こる関

係性攻撃よりも身体的攻撃や言語的攻撃に介入しようとする。

2 方法

2.1 予備調査

web 調査の精緻化およびシナリオを検討するために、教員経験のある心理学を専攻する大学院生 2 名を対象に予備調査を行った。期間は 2022 年 2 月上旬であり、個人配布による機縁法で行った。

内容は本調査で実施するシナリオおよびそれに関する質問と、性別や年齢などのデモグラフィックの質問、web 調査に関する自由記述が含まれた。

シナリオは攻撃行動の内容は Yoon & Kerber (2003) を参考に、「身体的攻撃」「言語的攻撃」「社会的排除」についてそれぞれ 2 つずつ作成した。Yoon & Kerber (2003) や Bauman & Del Rio (2006) では関係性攻撃のシナリオとして「社会的排除」に関する内容のみが用いられていたが、関係性攻撃は「無視・排除」「陰口」「噂の流布」の 3 因子からなることが指摘されていることから (和智, 2021), 「陰口」「噂の流布」についても 2 つずつシナリオを作成した。「身体的攻撃」「言語的攻撃」については複数因子からなることはこれまで指摘されていないため、そのまま 1 因子として扱った。その際にグループ内で起こったことであることを全てのシナリオに記載した。また Bell & Willis (2016) や Rogowicz, Del Vecchio, Dwyer-Masin, & Hughes (2014) によって被害者の反応や加害者の性質が回答に影響することが示されているため、本研究では和智 (2021) を参考にグループで起こりやすい被害者の反応 (「何も反応しない」と加害者の性質 (「リーダーシップがあり、授業中

は問いかけに積極的に応じる)」に統制した。

予備調査の結果をもとにシナリオおよび質問の修正を行った。

2.2 本調査

調査手続きと調査対象者 2022 年 3 月上旬に web 調査会社に登録された中学校教員 100 名 (男性 81 名, 女性 19 名, $M=52.72$ 歳, $SD=9.57$) を対象に行われた。勤務先の学校種は公立が 94 名, 私立が 6 名で, 男女共学が 98 名であった。教員歴は $M=28.19$ 年 ($SD=10.31$) であった。

質問紙の構成 予備調査で作成したグループでの攻撃行動に関するシナリオを提示し, それぞれについて①どの程度深刻だと思うか, ②どの程度起こりやすいか, ③どの程度被害者に同情するか, ④どの程度対応しようと思うかなどについて 5 件法で尋ねた。また性別, 年齢, 教員歴などのデモグラフィック変数についても尋ねた。

分析方法 ①~④のそれぞれについて, 攻撃行動ごとに得点の平均を算出し, それを「深刻さ得点」「起こる頻度得点」「被害者への同情得点」「介入の意志得点」とした。次に①~④のそれぞれについて, Shapiro-Wilk 検定を用いて項目の正規性を確認した。全ての項目で有意差が示されたため, 正規分布を仮定しないフリードマン検定を用いて「身体的攻撃」「言語的攻撃」「無視・排除」「陰口」「噂の流布」の差を検討した。フリードマン検定で有意差が示された場合には, Bonferroni の調整を用いて pairwise wilcoxon 検定を行った。分析には Rstudio を用いた。

倫理的配慮 web 調査の表紙には, 調査の目的, 倫理的配慮 (質問紙への回答が任意であり, 回答をもって同意とすること, データは統計的に

分析され、個人情報保護やプライバシーの尊重に最大限の努力をほらうこと、研究結果を発表する可能性があること、本研究は倫理審査委員会と教育学研究科長の承認を受けていること)を記載した。なお本研究は東京大学ライフサイエンス研究倫理支援室倫理審査専門委員会と教育学研究科長の承認の下、実施した(倫理審査番号 21-373)。

3 結果

3.1 深刻さ

まず信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .93$ であり、高い信頼性が示された。次にグループにおける攻撃行動の教師の捉え方の差を検討するために、まず Shapiro-Wilk 検定を用いてデータの正規性を検討した(表 1)。その結果、全ての攻撃行動においてデータの正規性が認められなかった ($p < .001$)。そこで「深刻さ得点」を従属変数、攻撃行動(身体、言語、無視・排除、陰口、噂の流布)を従属変数とする 1 要因のフリードマン検定を行った結果、有意な差が示されたので ($\chi^2(4) = 72.19, p < .001$)、pairwise wilcox 検定を行った。その結果、身体的攻撃が言語的攻撃、無視・排除、陰口、噂の流布よりも深刻さ得点が有意に高いことが示された ($p < .01; p < .05; p < .001; p < .001$)。また無視・排除、噂の流布が陰口よりも深刻さ得点が有意に高いことが示された ($p = .002; p = .02$)。

3.2 起こる頻度

まず信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .92$ であり、高い信頼性が示された。次にグループにおける攻撃行動の教師の捉え方の差を検討するために、まず

Shapiro-Wilk 検定を用いてデータの正規性を検討した(表 1)。その結果、全ての攻撃行動においてデータの正規性が認められなかった ($p < .001$)。そこで「起こる頻度得点」を従属変数、攻撃行動(身体、言語、無視・排除、陰口、噂の流布)を従属変数とする 1 要因のフリードマン検定を行った結果、有意な差が示されたので ($\chi^2(4) = 61.61, p < .001$)、pairwise wilcox 検定を行った。その結果、陰口が身体的攻撃、言語的攻撃、無視・排除、噂の流布よりも起こる頻度得点が有意に高いことが示された ($p = .001; p = .001; p < .001; p < .001$)。また噂の流布が身体的攻撃や無視・排除よりも ($p < .001; p < .001$)、言語的攻撃が身体的攻撃や無視・排除よりも起こる頻度得点が有意に高いことが示された ($p < .001; p < .001$)。

3.3 被害者への同情

まず信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .94$ であり、高い信頼性が示された。次にグループにおける攻撃行動の教師の捉え方の差を検討するために、まず Shapiro-Wilk 検定を用いてデータの正規性を検討した(表 1)。その結果、全ての攻撃行動においてデータの正規性が認められなかった ($p < .001$)。そこで「被害者への同情得点」を従属変数、攻撃行動(身体、言語、無視・排除、陰口、噂の流布)を従属変数とする 1 要因のフリードマン検定を行った結果、有意な差が示されたので ($\chi^2(4) = 68.38, p < .001$)、pairwise wilcox 検定を行った。その結果、身体的攻撃が言語的攻撃、無視・排除、陰口、噂の流布よりも被害者への同情得点が有意に高いことが示された ($p < .001; p < .001, p < .001; p < .001$)。また言語的攻撃、無視・排除、噂の流布が陰口よりも

被害者への同情得点が有意に高いことが示された ($p < .05$; $p < .001$; $p = .003$)。

3.4 介入の意志

まず信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .94$ であり、高い信頼性が示された。次にグループにおける攻撃行動の教師の捉え方の差を検討するために、まず Shapiro-Wilk 検定を用いてデータの正規性を検討した (表 1)。その結果、全ての攻撃行動においてデータの正規性が認められなかった ($p < .001$)。そこで「介入の意志得点」を従属変数、攻撃行動 (身体, 言語, 無視・排除, 陰口, 噂の流布) を従属変数とする 1 要因のフリードマン検定を行った結果、有意な差が示されたので ($\chi^2(4) = 63.05$, $p < .001$), pairwise wilcoxon 検定を行った。その結果、身体的攻撃が言語的攻撃, 無視・排除, 陰口, 噂の流布よりも介入の意志得点が有意に高いことが示された ($p < .001$; $p < .001$; $p < .001$)。

4 考察

本研究の目的はグループにおける攻撃行動を教師がどのように捉えているかを検討することであった。その結果、①身体的攻撃が言語的攻撃, 無視・排除, 陰口, 噂の流布よりも深刻と捉えられる傾向にあること, ②陰口が身体的攻撃や無視・排除よりもよく起こる行動として捉

えられる傾向にあること, ③身体的攻撃が陰口や噂の流布よりも被害者に同情を抱きやすい傾向にあることが示された。このことから仮説は部分的に支持された。また先行研究にならない、グループにおける攻撃行動について教師の介入の意志がどのように異なるかについても検討を行った。その結果、④身体的攻撃が陰口や噂の流布よりも介入の意志が高い傾向にあることが示された。このことから仮説は部分的に支持された。以下ではそれぞれの結果ごとに考察を行う。

4.1 深刻さ

深刻さについては、身体的攻撃と他の攻撃行動の間に差がみられ、身体的攻撃が他の全ての攻撃行動に比べて深刻と捉えられる傾向にあることが示された。また無視・排除と噂の流布が陰口よりも深刻と捉えられる傾向にあることが示された。この結果は Yoon & Kerber (2003) や Bauman & Del Rio (2006) と一部一致しているが、それらの研究では言語的攻撃との差がみられたものの、本研究では言語的攻撃と無視・排除, 陰口, 噂の流布との間には差が示されなかった。またこれまでではまとめて扱われていた関係性攻撃の間でも差が示された。

身体的攻撃は身体を用いて身体に影響を及ぼす攻撃行動であり、言語的攻撃や関係性攻撃に比べてけがなどのかたちで影響が顕在化しやす

表 1 攻撃行動別の教師の捉え方と分散分析結果

	身体的攻撃	言語的攻撃	無視・排除	陰口	噂の流布	χ^2 値	
深刻さ	4.54 (0.69)	4.19 (0.75)	4.28 (0.75)	4.05 (0.74)	4.21 (0.71)	72.19***	身体 > 言語, 無視・排除, 陰口, 噂の流布 無視・排除, 噂の流布 > 陰口
起こる頻度	3.69 (1.06)	4.09 (0.78)	3.77 (1.00)	4.29 (0.69)	4.07 (0.76)	61.61***	言語 > 身体, 無視・排除 陰口 > 身体, 言語, 無視・排除, 噂の流布 噂の流布 > 身体, 無視・排除
被害者への同情	4.30 (0.82)	4.02 (0.84)	4.10 (0.82)	3.80 (0.78)	3.99 (0.77)	68.38***	身体 > 言語, 無視・排除, 陰口, 噂の流布 言語, 無視・排除, 噂の流布 > 陰口
介入の意志	4.48 (0.70)	4.14 (0.80)	4.23 (0.80)	4.07 (0.80)	4.15 (0.76)	63.05***	身体 > 言語, 無視・排除, 陰口, 噂の流布

カッコ内は標準偏差

***, $p < .001$

いと考えられる。またこれまで関係性攻撃はまとめて1つの攻撃行動として捉えられてきたが、その中には無視・排除のようにグループに入れてもらえていないというかたちで外部者から見ても比較的わかりやすいものがある一方で、陰口のように外からは見えづらいものもあり、関係性攻撃の中でも見えづらいものが深刻と捉えられづらいのではないかと考えられる。このことから関係性攻撃は身体的攻撃に比べて深刻と捉えられづらく、その中でも陰口のように見えづらい攻撃行動が特に深刻と思われなことがうかがえた。

4.2 起こる頻度

起こる頻度については、陰口が他の全ての攻撃行動よりも起こりやすいと捉えられる傾向にあることが示された。また噂の流布は身体的攻撃や無視・排除よりも起こりやすいと捉えられる傾向にあることが示された。このことから関係性攻撃の一部と身体的攻撃に差がみられただけではなく、関係性攻撃同士でも差が示されており、関係性攻撃のなかにも起こりやすいと考えられているものとそうではないものがあり、教師の捉え方が異なることがうかがえた。

本研究の結果からは教師は関係性攻撃の中では陰口や噂の流布を無視・排除よりも起こりやすい攻撃行動として捉えていることがうかがえる。それらはグループ内で、特に陰で行われる攻撃行動であるために教師自身は発見しづらいつと考えられるが、本研究の結果からは教師のなかにそのような攻撃行動が起こっているはずであるという意識があることがうかがえる。一方でよく起こると捉えてしまうことが介入を阻害することも示されており (Swit, 2021), 関係性攻撃についてはよく起こると捉えられているこ

とは見えないことにも注意を払おうとしていることでもあるが、介入を阻害する可能性もはらんでいると考えられる。

4.3 被害者への同情

被害者への同情については、身体的攻撃が他の全ての攻撃行動よりも同情される傾向にあることが示された。また言語的攻撃、無視・排除、噂の流布が陰口よりも同情される傾向にあることが示され、関係性攻撃の中でも差がうかがえた。

陰口に関しては本研究では起こりやすい攻撃行動であると考えられる傾向にあることも示されており、被害を受ける者が多いと考えられるために被害者に同情を抱きづらいのではないかと考えられる。

4.4 介入の意志

介入の意志については、身体的攻撃と全ての攻撃行動の間に差が示された。このことから身体的攻撃に比べて言語的攻撃や関係性攻撃は介入されづらいことがうかがえた。

無視・排除は関係性攻撃の中では比較的顕在化しやすく、そのために関係性攻撃の中では深刻と捉えられ、被害者に同情されやすいことが本研究からはうかがえていた。しかし教師も深刻で被害者のことをかわいそうだと感じており、教師の感度は高い一方でやはり身体的攻撃に比べると介入を行う意志は低いことがうかがえ、わかっているけれども介入できないならこの要因があるのではないかと考えられる。

5 まとめ

本研究の結果からは、教師は関係性攻撃よりも身体的攻撃をより深刻と捉え、より被害者に

同情し、より介入しようと思うことが示された。また関係性攻撃の間でも差が示されており、特に陰口のような見えづら関係性攻撃は軽視されやすいことがうかがえた。このことから関係性攻撃の中でも第三者からは見えづらく、グループの中に閉じてしまう攻撃行動において教師の介入に難しさがあるのではないかと考えられる。今後グループの中に閉じてしまうことが教師の介入の難しさにどのように影響しているのかなど、さらなる検討が必要であると考えられる。

6 本研究の限界と今後の展望

本研究に関しては3つの限界点が挙げられる。まず1つ目はシナリオの項目数の問題である。本研究では研究対象者の負荷を考慮してシナリオの項目数を限定したが、そのために全ての攻撃行動をカバーできなかった可能性が考えられる。特に関係性攻撃については本研究で独自に作成した箇所でもあるため、今後シナリオの項目数や内容などさらなる検討が必要であると考えられる。

2つ目は研究対象者の偏りおよび人数の問題が挙げられる。本研究では対象者が比較的経験年数が長く、かつ公立共学の教員に偏ってしまった。また人数も100名と限られており、十分な人数が確保できたわけではない。この点について、今後は教師の属性を考慮しつつ、人数を増やした検討が必要であると考えられる。

3つ目は項目の得点が全体的に高くなってしまった点である。本研究ではノンパラメトリックな方法を用いることで統計的に処理する工夫を行ったが、項目の内容などを再検討する必要があると考えられる。

以上の限界点はあるものの、本研究の結果はこれまで少なかった教師に焦点を当てたいじめ

研究の第一歩であり、教師の視点からいじめを捉えることも重要であることを示す一助になったのではないかと考えられる。今後は上記の限界点を踏まえて量的にさらに検討を行うとともに、より詳細に質的に捉え方を検討する必要もあると考えられる。

引用文献

- Adler, P. A., & Adler, P. (1995). Dynamics of Inclusion and Exclusion in Preadolescent Cliques, *Social Psychology Quarterly*, 58 (3), 145-162. <https://doi.org/10.2307/2787039>
- Atlas, R. S., & Pepler, D. J. (1998). Observations of Bullying in the Classroom, *The Journal of Educational Research*, 92 (2), 86-99. <https://doi.org/10.1080/00220679809597580>
- Bauman, S., & Del Rio, A. (2006). Preservice Teachers' Responses to Bullying Scenarios: Comparing Physical, Verbal, and Relational Bullying, *Journal of Educational Psychology*, 98 (1), 219-231. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/0022-0663.98.1.219>
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational Aggression, Gender, and Social-Psychological Adjustment, *Child Development*, 66 (3), 710-722. <https://doi.org/10.1111/j.1467-8624.1995.tb00900.x>
- Crick, N. R., Werner, N. E., Casas, J. F., O'Brien, K. M., Nelson, D. A., Grotpeter J. K., & Markon K. (1999). Childhood aggression and gender : A new look at an old problem. In D. Bernstein (Ed.), *Gender and motivation*. (pp. 75-141). Lincoln: University of Nebraska Press.
- Espelage, D. L., & Swearer, S. M. (2003). Research

- on School Bullying and Victimization: What Have We Learned and Where Do We Go From Here?, *School Psychology Review*, 32 (3), 365-383. <https://doi.org/10.1080/02796015.2003.12086206>
- Garandau, C. F., & Cillessen, A. H. N. (2006). From indirect aggression to invisible aggression: A conceptual view on bullying and peer group manipulation, *Aggression and Violent Behavior*, 11 (6), 612-625. <https://doi.org/10.1016/j.avb.2005.08.005>
- 本間友巳 (2003). 「中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応」, 『教育心理学研究』, 51 (4), 390-400 頁. https://doi.org/10.5926/jjep1953.51.4_390
- 河村茂雄・武蔵由佳 (2008). 「学級集団の状態といじめの発生についての考察」, 『教育カウンセリング研究』, 2 (1), 1-7 頁. https://doi.org/10.24665/jjec.2.1_1
- 餅川正雄 (2011). 「学校のいじめ問題に関する研究 (Ⅲ)」, 『広島経済大学研究論集』, 34 (1), 51-70 頁.
- 文部科学省 (2003). 「いじめへの対応のヒント」文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/shiryu/06120716/005.htm (2022 年 3 月 24 日)
- 文部科学省 (2013). 「いじめの防止等のための基本的な方針」文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/06/26/1400030_007.pdf (2022 年 3 月 24 日)
- 文部科学省 (2021). 「令和 2 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210105-mext_jidou02-100002753_01.pdf (2022 年 3 月 24 日)
- 森田洋司・清永賢二 (1986). 『いじめ 教室の病い』, 金子書房.
- 荻上チキ (2018). 『いじめを生む教室 子どもを守るために知っておきたいデータと知識』, PHP 新書.
- Olweus, D. (1993). *Bullying at School: What We Know and What We Can Do*. Oxford: Wiley-Blackwell publishers. (松井賚夫・角山剛・都築幸恵 (訳) (1995). 『いじめ こうすれば防げる ノルウェーにおける成功例』川島書店)
- Owens, L., Shute, R., and Slee, P. (2000). “Guess what I just heard!?”: Indirect aggression among teenage girls in Australia, *Aggressive Behavior*, 26 (1), 67-83. [https://doi.org/10.1002/\(SICI\)1098-2337\(2000\)26:1%3C67::AID-AB6%3E3.0.CO;2-C](https://doi.org/10.1002/(SICI)1098-2337(2000)26:1%3C67::AID-AB6%3E3.0.CO;2-C)
- Salmivalli, C., Kärnä, A., & Poskiparta, E. (2011). Counteracting bullying in Finland: The KiVa program and its effects on different forms of being bullied, *International Journal of Behavioral Development*, 35 (5), 405-411. <http://dx.doi.org/10.1177/0165025411407457>
- Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A. (1996). Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group, *Aggressive Behavior*, 22 (1), 1-15. [https://doi.org/10.1002/\(SICI\)1098-2337\(1996\)22:1<1::AID-AB1>3.0.CO;2-T](https://doi.org/10.1002/(SICI)1098-2337(1996)22:1<1::AID-AB1>3.0.CO;2-T)
- Swit, C. S. (2021). Differential associations between relational and physical aggression: why do

- teachers and parents perceive these behaviors differently?, *Early Child Development and Care*, 191 (3), 321-337. <https://doi.org/10.1080/03004430.2019.1621304>
- 山中一英 (2009). 「学級集団と友人関係」をめぐる諸問題への社会心理学的接近, 『兵庫教育大学研究紀要』, 34, 23-34 頁.
- Yoon J. S., & Kerber, K. (2003). Bullying: Elementary Teachers' Attitudes and Intervention Strategies, *Research in Education*, 69 (1), 27-35. <https://doi.org/10.7227/FRIE.69.3>
- 和智遥香 (2021). 「グループにおける関係性攻撃に関する検討」, 『東京大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)』.
- Bell, K. J. S., & Willis, W. G. (2016). Teachers' perceptions of bullying among youth. *The Journal of educational research*, 109 (2), 159-168. <https://doi.org/10.1080/00220671.2014.931833>
- Rogowicz, S. T. , Vecchio, T. D., Dwyer-Masin, T., & Hughes, E. M. (2014). The influence of aggressors' characteristics on teachers' responses to physical and relational aggression. *Journal of applied social psychology*, 30 (4), 355-374. <http://dx.doi.org/10.1080/15377903.2014.950443>